

システム論を生かした理解(1)

システムとは、相互作用する「要素」からなる「全体」です。家族（要素）は相互作用し合い、家族システム（全体）を作ります。学校システムや社会システムも同様です。要素間の相互作用が変わればシステムも変わり、また、それぞれのシステムは、お互いに影響し合います。このことを活用して、システム内の相互作用を変化させたり、システム間の関係を変え、問題解決を図ろうとします。

システム論の基本的な考え方

「ある状況下での行動選択の仕方」には、その人のパターンがあると考え、個々の人間は、それぞれに問題を解決しようとして行動するが、それにもかかわらず、システムとしては、「問題を維持・強化」するようなパターンを繰り返すシステムの中で起こっている出来事から、それぞれのパターンを抽出するパターンは、特定の文脈（ストーリー）の中で起こっている問題解決のためには、パターンを作り上げている「文脈」を変える（新しく作る）文脈と文脈の「ズレ」が「問題」を起こすのであり、そのズレを修正していくパターンの一部を変えて、関係者間の相互作用に変化をもたらす

正しい文脈が有効なのではなく、関係者が問題解決に向かえるような文脈が有効。

パターンを変えるときは、一部分の小さな変化でいいし、変えられる人が変えればよい。

母親から見た文脈

R男は、黙っていればやらない子。やらなければ困るのはR男自身。だからこそ、一つ一つ言って、きちんとやる習慣をつけさせなければならない。

R男のためを思い、口うるさく言って、R男が「きちんとやる習慣」が身につくように、母親として習慣作りの役割を果たそうとする母親。

パターン

母は、R男がちゃんとやるように習慣作りをしなければと思う

母は、いちいちちゃんとやっているか確かめる

R男は、自分ばかり言われ、信用されていない、責められていると感じる

R男は、母に反抗し、激しいケンカとなる

父親が仲裁にはいるが決裂する

みんなおもしろくない思いで解散する

R男から見た文脈

やるときはちゃんとやっているし、後でやろうと思っているのにも、しつこく「あれやったか、これやったか」と言われると腹が立ってくる。兄が同じようにしていても何も言わないくせに。

母親は、オレを信用していないし、オレにばかり「ちゃんとやれ」と求める。どうせオレが悪いんだろうと思いつつ、不満を募らせるR男。

文脈の「ズレ」の修正を図って、問題の解決を考える

パターンの一部を変え、問題解決を考える

例：近所のおばさんとの人間関係に悩むA子の母

最近、母親は、中2のR男に苦戦している。何度言っても学校からのプリントを出し忘れたり、薬も言わなければ飲まないでしまう。勉強にしてもしかりで、毎日あれこれ言わないと何一つ満足にこなさない。そんな母親にR男は、「ちゃんとやってる」「しつこい」「どうしてオレばかり責めるんだ」などと言って、最後はケンカになる。父親が仲裁に入るが、父親も水掛け論の二人に腹を立て、「勝手にしろ」と言って、その場を離れる。

例：『『忘れ虫』が働き、つい忘れることが多い中で、忘れずにちゃんとやっている部分も多いR男をきちんと見て評価している母親』という文脈を作り、対応を考える

例：パターンの一部を変え、「父親は、仲裁役をやめ、その代わりに、時にR男の肩をもって代弁し、次は母親の肩をもって代弁をする」ことにする

【参考文献】・吉川悟・村上雅彦編、『思春期・青年期の困難事例』、金剛出版、2001

・吉川悟編、『学校臨床』、金剛出版、2003